

## 1 研究の目的

本プロジェクトは平成14-18年度科学研究費補助金（基盤研究S）「先史アンデス社会における文明の形成プロセスの解明」（研究代表者：加藤泰建）において得られた研究成果を発展させ、平成19-22年度科学研究費補助金（基盤研究A）「都市と文明の起源に関する人類学的研究」（研究代表者：加藤泰建）を基盤に、より具体的な成果を得ることを目指したものである。

とくに本プロジェクトでは、研究スペースを活用し、図面化・写真化して保管されている現地遺跡の膨大な考古学資料をデジタル化して分析の可能性を広げること、研究成果の発信拠点として国内外研究者との研究交流を深めること、研究会やワークショップなどの開催によって議論を活発化しさらなる研究の発展に役立てることを目的とした。

## 2 研究の経過と研究成果

南米の中央アンデス地帯では、形成期（紀元前3000年～紀元前50年頃）と呼ばれる時期に、祭祀建造物（神殿）を核とした社会発展があった。代表者は長年にわたりペルーのクントウル・ワシ神殿遺跡の発掘調査をおこない、膨大な資料を収集してきた。近年の古代アンデス研究は、資料の充実と自然科学や地理情報システムなどを用いた新しい分析方法が進展しており、また理論的研究も活発となっている。このため、研究の現状としては、新しい枠組みの構築が求められているといえる。

21年度の主な成果は以下の通りである。

### (1) GIS（地理情報システム）を活用した考古学的分析の実施

遺跡周囲の地形情報、生態環境、資源分布、移動ルートなどを、GISを利用して分析するための基礎的作業をおこなった。さらに今年度は、当該時期のペルー北部の地域間交流において利用されたルートを解析する具体的な分析作業をおこなうとともに、今後、他地域で同様の分析が可能となるように、GISの汎用的な作業手順マニュアルの作成を試みた。

### (2) アンデス考古学資料デジタル化の拡大

すでに完成しその一部が公開されているクントウル・ワシ神殿遺跡のデータベース（KWDB）は、内外から大きな注目を集めている。今年度は資料のデジタル化の拡大を目指し、プロジェクトスペースで管理されている過去約50年間にわたる日本研究者によるアンデス調査資料のうち、写真資料を中心にデジタル化を進めた。その成果は、今年度に行われた国際会議、公開シンポジウム成果の出版において活用された。

### (3) ワークショップと研究会の開催

遺跡から出土する遺構（建築物などの痕跡）の新たな分析方法として、写真撮影による3次元計測と3Dモデルの作成法を確立するため、外部から専門家を招きワークショップをおこなった。これにより、今後ペルー現地の遺跡調査で応用できる見通しが得られた。また、ペルーと日本の研究者を招いてアンデス形成期に関する研究会をおこない、最新の研究成果を巡る活発な議論をおこなった。

なお、本研究の成果の一部は、『古代アンデス 神殿から始まる文明』（2010年2月、大貫良夫、加藤泰建、関雄二、朝日新聞社出版、代表者は「日本のアンデス文明研究の展開」、pp.249-266を執筆）として刊行された。